



NORTHERN OWLS

VOL. 29
2021. 3

北海道美術館学芸員研究協議会会報
「NORTHERN OWLS」第29号
■発行
北海道美術館学芸員研究協議会
事務局／北海道立近代美術館内
札幌市中央区北1条西17丁目
TEL. 011-644-6881
FAX. 011-644-6885
<https://doubigakugeiken.com/>

だんわ 【談輪】

苦名 真——「常設展型」美術館を目指して

北海道立近代美術館学芸副館長

美術館を「常設展型」と「特別展型」に分けてとらえてみると、欧米の大美術館は一般的に前者だといえる。つまり常設展がメインであり、私たちもそれを目当てに訪れるのである。一方、日本の美術館には後者が多い。戦後、公立美術館が次々に建てられたが、「はじめにハコありき」で、コレクションは後からとなり、その分、特別展に集客を頼ったため、「美術館は特別展を見に行く場所」というイメージが定着してしまったのである。

そんな中で当館は常設展を重視してつくられた。常設展示室のほうが広いのである。先見の明があり、正しいあり方だったと思う。しかしながら開館以来 40 数年、常設展にはあまり人が入らない状況が続いている。「常設展型」を目指したが、現実には「特別展型」であると認めざるを得ない。

コレクションの見せ方には二つの方向がある。一つは収集方針を反映し、各コレクションの名品を見せる展示であり、もう一つは収集方針やジャンルを横断するテーマ展である。コレクションを縦に割るか横に割るかの違いといってもいい。

縦割りの名品展のメリットとしては、館の収集方針が来館者にわかりやすく伝わるという点が挙げられる。他方、デメリットは、特に地域住民にとっては、いつ行っても同じような作品が出ているように見え、足が遠のいてしまうということである。観光客には概して評判がいい。何度も訪れるわけではないので、一度にまとめて代表的なコレクションが見られるほうが好都合なのである。

では横割りのテーマ展はどうか。メリットとしては、ふだん目にしない作品が出品される、同じ作品でも別な視点から見ることで新たな魅力が引き出される、ということだろうか。デメリットは、ちょうど名品展のメリットの裏返しである。つまり、館の特色がわかりにくい、期待して来館したのにお目当ての作品が見られない、ということである。地元リピーターには好評だが、観光客にはあまり歓迎されない。

あちら立てればこちら立たず。悩ましいところだが、リクエストの多い名品は年に1回は出すようにしたり、時には斬新なテーマ展を企画したりと、名品型とテーマ型のバランスを取りつつ、試行錯誤を重ねてきた。

予算の削減により常設展の開催回数が減っていることも問題である。開館当初は年に7回だったのが近年は3回。回数が少ないと地元リピーターが減る。すると観覧料収入も減り、それが翌年度の予算に反映され、さらに展覧会が開けなくなる、という悪循環に陥ってしまうのである。

理想としては、代表的なコレクションがいつでも見られる名品型の常設ギャラリーを設けたうえで、別の展示スペースで随時テーマ型の企画展を開くという、地域住民と観光客双方の期待に応えられる縦・横割り展示の併設とし、名実ともに「常設展型」美術館を目指したい。それには展示スペースの大幅な拡張が不可欠である。今後想定される改築に向けて、こんな構想を温めているところである。

NORTHERN OWLS VOL.29 INDEX

談輪／「常設展型」美術館を目指して 苦名 真……………	1	規約・役員名簿……………	5
特別講話／なぜいま縄文なのか？ 瀬川拓郎……………	2		

本紙は、第 27 回北海道美術館学芸員研究協議会の(平成 31 年 3 月 7 日～8 日、会場・北海道立近代美術館)における講演の内容を掲載しています。

なぜいま縄文なのか？ 生き残る日本列島人の原初の思想をめぐって

札幌大学教授

瀬川 拓郎

【瀬川 拓郎】

1958年、札幌市生まれ。岡山大学法文学部卒業後、旭川市職員に。旭川市博物館学芸員としてアイヌ民族史を研究し、同館館長を務める。2018年から現職。専門は、考古学ならびにアイヌ学。



縄文時代の研究は、考古学の特性上どうしても物質文化に偏りがちです。しかし一万年続いた縄文文化を特徴づけているのは、縄文人が途方もない労力と時間を注いだ巨大な環状列石・盛土遺構・周堤墓・貝塚、あるいは土偶など「心」にまつわるモノです。

そうである以上、困難であるとはいえ、その背後にある縄文の精神世界を明らかにしていかなければ、「心の文明」ともいえる縄文文化を真に理解したことにはならないのではないのでしょうか。

そこで今回の講演では、考古学・神話伝説・民俗誌から、この縄文時代の世界観にアプローチしてみたいとおもいます。

まず、本土の海民・アイヌ・沖縄人のなかに、海と山を往還する神の観念、すなわち死と再生の象徴である山（女性）と、生の象徴である海（男性）の二元的な構造をもち、その二つの世界が循環する世界観が共通してみられることを指摘し、その成立が縄文時代にまでさかのぼる可能性を考えます。

さらに出雲大社など海辺の古社、各地の山中の修験道場、ナマハゲなど来訪神の祭りといった日本列島の海辺や山中の精神世界のなかに、この縄文の世界観が色濃くかがやけるとともに、「心の文明」である縄文文化の特性が、その後、日本列島の非農耕民たちのなかに呪術や芸能の力として受け継がれてきたことを指摘します。

縄文の精神世界は、弥生文化に淘汰されてしまったわけではなく、いまなお生き続けているのではないかと。一万年続いた縄文文化の理解なくして、日本文化やアイヌ文化は理解できないのではないかと。そして、それこそが縄文文化の現代的な意義にほかならないのではないかと——今回の講演が、日本列島の「心の文明」を振り返ってみる、ひとつのきっかけになれば幸いです。

1. 山の女神のもとへ向かう海の男神—古代海民とアイヌに共通する神話・伝説

1) 『肥前国風土記』佐嘉郡の伝説

「嘉瀬川の川上に石神があり、名を世田姫という。海の神（鰐魚—わに—をいう）が毎年、流れに逆らって潜り上り、この神のところにくる。そのときに海の底の小魚がたくさん従ってくる。一方で、人がその魚をおそれかきこめば災いはないが、他方、人が捕って食うと死ぬことがある。およそこの魚どもは二、三日とどまり、もとへ還って海に入る」

2) 『出雲国風土記』仁多郡の伝説

「古老が伝えて言うことには、和迺（わに）が、阿伊の村におられる神、玉日女命を慕って、川を遡ってやってきた。その時、玉日女命が石で川をふさいだので、会うことができないで愛しく思っていた。だから恋山といった」

3) 海の神としての「ワニ」

全国各地の漁民のあいだでは、サメ・シャチ・ジンベエザメ・クジラなどが、豊漁の神である「エビス」と総称されていた。『肥前国風土記』の伝説でも、ワニはたくさん的小魚をしたがえて川をのぼってくる。これはエビスとされていたジンベエザメやクジラの生態をおもわせる。ワニは、特定の種にかぎらないエビス神的な性格をもつものの総称。ワニが漁撈にかかわって尊崇される存在であったとすれば、その伝説を伝えてきたのは海民。

4) アイヌの伝説

・「沖の神であるシャチは、山の神の娘に会うため、高山へむかって川をのぼる。途中、サマイクル神やオキクルミ神らから、さまざまな妨害をうけるが、土産をもってなんとか娘のもとへむかい、山の神にほめられる」

・「シャチの神は、オキクルミ神の妹神にあいたくなり、川をのぼる。オキクルミの家にはだれもおらず、川をくだって帰る。ある夜、妹神が夢にあらわれ、私を恋い慕っても夫婦にはなれないので、金の矢筒に姿を変えていた。私のことは忘れてシャチの女神を妻とせよ、という。そこでシャチは妹神を忘れ

ようとつとめる」

5) アイヌにとっての「ワニ」

アイヌにとってシャチは海の神でありクジラや魚をもたらすエビス的存在。シャチ=ワニ。

2. なぜ「高山」なのか?

1) アイヌにとっての高山山頂

海辺の洞窟から地下を抜けた先にある高山山頂は、アイヌの他界である。出口は山頂の沼とされる。アイヌと古代海民に共通する伝説は、海の神が高山山頂に坐す亡き妻（山の女神）を訪ねる、他界への往還伝説とみられる。日本列島の多くの高山山頂に縄文人の足跡が残る事実も、このような世界観と関係するか。『出雲国風土記』とアイヌの伝説では、山の女神が川をのぼってくるワニ（シャチ）を阻止するが、その理由は夫を他界に迎え入れないためだったと理解できる。

2) 地下の他界の入口を洞窟とする思想

洞窟埋葬の存在から縄文時代にも存在したと推定できる。古墳時代まで各地の洞窟で埋葬がおこなわれていたほか、アイヌと南島の人びとにも認められる。島根県では今なお海蝕洞窟を黄泉の世界の入口と伝える。

3) 海の神と山の女神が往還する世界観

アイヌと同じ構造をもつ世界観・他界観は、南島でもみられる。日本列島の周縁の人びとの世界観・他界観。

3. なぜアイヌ・海民・南島なのか?

1) 縄文をとどめる人びと

- ・アイヌと南島の人びとは、形質的・遺伝子的に縄文人の特徴を強く残す。
- ・アイヌ・南島・海民は、縄文習俗であるイレズミを近代までおこなう。
- ・各地の海民は縄文習俗である抜歯を弥生時代から古墳時代までおこなっており、九州西北部の海民も抜歯を近代までおこなっていた。
- ・九州西海岸の海辺には、縄文語としてのアイヌ語地名が残るほか、弥生～古墳時代まで縄文人の形質的特徴を色濃くとどめる海民がいた。

2) 共通する伝説の意義

縄文の習俗を伝え、漁撈や狩猟など縄文伝統の生業に従事する人びとが伝えた共通の伝説は、縄文起源の伝説・他界観だったのではないか。

5. 縄文の世界観を伝える人びと

1) 海蝕洞窟を他界の入口、山頂の沼を出口とする羽黒山の伝説

日本海に面した山形県鶴岡市由良の八乙女洞窟が羽黒山の鏡池につながっているとの伝説。由良は、新潟から津軽のあいだで活躍した海民の拠点と伝えられる。出羽三山のひとつである羽黒山は、同じ鶴岡市の標高約400mの山。和歌山県の熊野三山、福岡県の英彦山とともに日本三大修験山。修験道における山は「死の世界」「死者の世界」として他界とむすびついている。とくに出羽三山では、麓で亡くなった人の霊が山頂に

とどまるという信仰があり、死者供養が活発におこなわれている。

2) 列島各地の修験道場の伝説

- ・日本海に面した新潟県新潟市の妙光寺裏に海蝕洞窟。燕市の国上山の真言宗国上寺本堂裏の洞窟につながっているとの伝説。国上寺は8世紀初頭の創建と伝えられる越後最古の寺であり、越後の修験道の中心道場。
- ・神奈川県藤沢市江の島の海蝕洞窟が、相模原市石老山の真言宗顕鏡寺裏の洞窟などにつながっているとの伝説。
- ・島根県松江市沖泊浦多古の海蝕洞窟が、臨済宗華蔵寺の枕木山につながっているとの伝説。華蔵寺の創建は修験道の行場にかかわるとされる。
- ・富山県中能登町西馬場の穴が、北陸の修験道の中心道場である石動山山頂の御前山に通じているとの伝説。
- ・石動山山頂の鱒ヶ池と、富山湾の氷見市灘浦沖合の蛇ヶ島の石清水の底が通じているとの伝説。

3) なぜ修験者なのか?

狩猟民や海民と深いかかわりを持ち、海辺や高山山頂を他界とみなして修行をおこなった修験者もまた、縄文の世界観・他界観を伝えてきたか。

5. 高層神殿と縄文の世界観

1) 出雲大社の高層神殿

出雲大社の神殿は、中世には高さ48m、古代には96mあり、長さ100mの階段が架けられていたと伝えられる。48mは15階建てマンションに相当する。平安時代貴族の子弟の教科書『口遊』には、当時の高層建築ベスト3の1位が出雲大社、2位が東大寺大仏殿（高さ45m）とあり、平安時代末に大社に詣でた寂蓮法師は、神殿が雲のたなびく山のなかばの高さにそびえ、この世のものと思われなかった。

2) 海から山へ向かう神—出雲大社と縄文の世界観

年に一度、神議のため海からやってきた全国の神々は、大社西方の稲佐の浜に上陸し、山裾を龍蛇神に先導されながら大社の神が坐す神殿へ向かう。しかし、もともと神々が上陸したのは、この浜ではなかった。大社がある出雲平野西部は、古代には神門水海と呼ばれる潟湖が広がっていた。この潟湖と海のあいだには、大社から南へ砂洲が突きだし、中世にはこの砂洲の先端に設けられた湊社で神を迎えた。海からやってきた神は、大社の背後に控える北山山系を正面にみながら、砂洲の上を大社へ向かった。

時を定めて海からやってきた神が、山を模したかにも見える高層の神殿の神のもとへ往還する大社のありかたは、海と山の神の往還という縄文の世界観と重なる。湊社は、神が海から上陸する南島の「浜錠口」であり、大社へ向かう砂洲上の道は、山の女神が坐す「カミ山」へ至る「カミ道」にあたる。それは縄文の世界観を具現化したものにみえる。

高層の神殿はいわば人工の山として見る者を圧倒しただろう。出雲は、縄文の世界観や他界観を濃密に伝える海民の世界。大社の神事ではアシカの類いの海獣皮を敷物に用い、出雲国内諸社の祭祀を司った出雲国造が亡くなると、かつてその遺体は水葬にされた。この事実は、大社自体、海民的な性格を強く

帯びていたことを物語る。大社は海民の神殿であり、縄文の世界観を具現化する装置だったのではないか。

3) 縄文の巨木建築から出雲大社へ

森浩一は、富山県真脇遺跡（縄文晩期）や石川県チカモリ遺跡（縄文後～晩期）など縄文時代の「水辺」の巨木文化（高層神殿？）が、その後、弥生・古墳時代には鳥取県長瀬高浜遺跡の巨大高床建物や鳥取県稲吉角田遺跡出土土器絵画の高層建築などに受け継がれ、高層神殿の出雲大社を生み出したと指摘。縄文中期の青森県三内丸山遺跡の高層建築もその流れにあるものか。

6. 縄文性をとどめる人びとの呪能と芸能

1) 海民の呪能

祝（はふり）は寿ぎを意味し、祝子・祝部は神に仕える人を指す。ただし喜田貞吉によれば、この「はふり」は「ほふり」の意であり、動物を屠って神に供することから起こった名であるという。

原田信男は、祝が動物供犠の祭儀に従事していた事実は『日本書紀』から近世の史料にまで言及されているとし、古代には祝がヤマト政権に与しない土着集団の「土蜘蛛」とも呼ばれていたと指摘している。この動物供犠で注目されるのが古代の卜部だ。

卜部は律令国家で祭祀を司った官庁の神祇官に属し、亀卜という呪術をおこなって怪異を管理するとともに、動物供犠の祭祀に従事した。かれらは沓岐・対馬・伊豆から選ばれたが、卜部の姓をもつ人びとは九州から東北の各地の海辺にもいた。

この各地の卜部は、海産品を貢納し、亀卜やト骨などの呪術に従事するとともに、集落内で狩猟獣や家畜を屠る祭祀をおこなっていたことが考古学的に明らかになっている。

ヤマト政権や律令国家が、土蜘蛛と呼ばれて差別された土着集団や海民の卜部に動物供犠の祭祀をおこなわせていたのは、かれらが農耕民の世界にはない強い呪能をもつとみなされていたからだろう。

2) 縄文性としての呪能と芸能

神祇官の卜部の出身地である沓岐・対馬・伊豆は、縄文時代の漁撈・海獣狩猟の先進地に重なる。また、卜部の用いたト骨が出土する弥生時代や古墳時代の遺跡は、ほとんどが海民の「奥津城」とされる海蝕洞窟である。

卜部は、弥生～古墳時代まで抜歯などの縄文習俗をみせていた海民の末裔であり、したがってかれらと動物の濃密な関係も縄文伝統と考えることができそうだ。

また、王権と対立し、エミシなどとともな夷狄（王化にしたがわない周辺集団）とされた南九州の隼人は、畿内やその周辺に移住させられ、歌舞の奏上という芸能によって王権に奉仕し、イヌの吠え声を発する呪術によって宮廷の守護に従事した。大和国山中におり、王権から夷狄とされた狩猟民の国栖も、隼人と同様、歌笛の奏上という芸能によって王権に奉仕し、その芸能は王権を守護する呪術的な性格をもっていた。隼人がいた南九州の山間部の人びとには、古墳時代まで縄文人の形質的特徴が認められるが、縄文性をとどめた人びとには呪術と芸能の

力があり、それは王権の存続に不可欠と認識されていたのではないか。

そして、王権や国家の祭祀が縄文性を帯びた人びとによって執り行われ、かれらの呪能が古代の祭祀に不可欠だったとすれば、出雲大社が縄文の世界観を可視化する装置、縄文の神殿だったとしても、いっこうに不思議ではない。古代の出雲や南九州の海民にみられる豊かな神話性も、それが縄文の精神世界に由来するものだったと考えてみたくなる。

おわりに

海と山の二元的世界からなる縄文の世界観は、海中に屹立する山脈という、日本列島の風土のなかで育まれたものといえよう。さらに、その海と山の空間的な構造に生と死を投影したものが、日本列島人の基層的な思想となっていたようだ。

縄文人は弥生人に淘汰されたのではなく、縄文文化も弥生農耕文化に上書きされてしまったのではなかった。日本列島には、失われたかにも見える二千年以上前の縄文の思想がいまなお息づいているらしい。とすれば、それこそが縄文文化の現代的な意義といえるのではないだろうか。

■北海道美術館学芸員協議会規約

令和3年3月現在

◆第1条 (名称)

本会は北海道美術館学芸員研究協議会 (略称・道美学芸研) と称する。

◆第2条 (目的)

本会は博物館学、美学、美術史等についての研究、協議を行なうとともに会員相互の連携、情報交換を図り、北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するものの資質の向上、および各館の活動の充実に資することを目的とする。

◆第3条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 研究会の開催
2. 会報の発行
3. 研究協議内容の収録
4. その他必要な事業

◆第4条 (会員)

本会は北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するもの及び本会の趣旨に賛同する美術館等の職員、博物館学、美学、美術史研究者等によって組織される。会員は総会で認められたものをこれに当てる。

◆第5条 (事務局)

本会の事務局は北海道立近代美術館学芸部に置く。

◆第6条 (役員)

本会の役員は下記のとおりとする。

- 会 長 (1名) 会員から選出。
副会長 (1名) 会員から選出。
幹事長 (1名) 北海道立近代美術館から選出。
幹 事 (9名) 事業担当4名、会報担当3名、会計担当2名を会員から選出。それぞれにチーフ各1名を置く。

監 査 (2名) 上記役員所属館以外の会員から選出。

* 役員の任期は2年とする。但し再選は妨げない。また欠員が出た場合、当該美術館から補い任期満了まで務める。

◆第7条 (会議)

本会の会議は、総会及び役員会とする。

1. 総会は年1回開き、次の事項を協議し、これを決定する。
 - (1) 予算及び決算に関すること。
 - (2) 規約改正に関すること。
 - (3) 役員を選任及び新入会員の承認に関すること。
 - (4) その他、特に重要な事項。
2. 役員会は随時、会長が召集し、次の事項を協議する。
 - (1) 総会に関すること。
 - (2) 研究会の運営に関すること。
 - (3) その他、必要な事項。

◆第8条 (会計年度)

本会の会計年度は1月1日から同年12月31日までとする。

◆第9条 (会費)

会費は年3000円とする。ただしやむを得ない事情により、会員が所属する美術館等を休業(休職)した場合は、役員会での合議により会費を減免等することができる。

◆付則

本規約は平成6年1月1日から施行する。

- 平成9年1月1日一部改正。
平成10年2月1日一部改正。
平成13年3月9日一部改正。
平成15年3月6日一部改正。
平成30年3月1日一部改正。

■北海道美術館学芸員協議会役員

令和2年6月30日まで

会 長	佐藤 友哉 (札幌芸術の森美術館 館長)
副会長	佐藤 幸宏 (北海道立近代美術館 学芸副館長)
幹事長	苫名 真 (北海道立近代美術館 学芸部長)
幹事 (事業)	五十嵐聡美 (北海道立近代美術館 学芸統括官) *
	坂本 真惟 (札幌芸術の森美術館 学芸員)
	門間 仁史 (北海道立旭川美術館 主任学芸員)
	平 利弘 (北海道三岸好太郎美術館 学芸員)
幹事 (会報)	岩崎 直人 (本郷新記念札幌彫刻美術館 業務係長) *
	三浦 泰之 (北海道博物館 学芸主幹)
	村山 史歩 (北海道立近代美術館 主任学芸員)
幹事 (会計)	大下 智一 (北海道立近代美術館 学芸企画課長) *
	田村 允英 (北海道立近代美術館 学芸員)
監 事	苫名 直子 (公益財団法人 北海道立文学館 学芸課長) *
	宮井 和美 (モエレ沼公園 学芸員)

(* はチーフ)

令和3年3月14日まで

会 長	佐藤 友哉 (札幌芸術の森美術館 館長)
副会長	苫名 真 (北海道立近代美術館 学芸副館長)
幹事長	中村 聖司 (北海道立近代美術館 学芸部長)
幹事 (事業)	五十嵐聡美 (北海道立三岸好太郎美術館 副館長) *
	坂本 真惟 (札幌芸術の森美術館 学芸員)
	門間 仁史 (北海道立旭川美術館 主任学芸員)
	野田佳奈子 (北海道立近代美術館 学芸員)
幹事 (会報)	岩崎 直人 (本郷新記念札幌彫刻美術館 業務係長) *
	三浦 泰之 (北海道博物館 学芸主幹)
	星野 靖隆 (北海道立近代美術館 学芸員)
幹事 (会計)	大下 智一 (北海道立近代美術館 学芸企画課長) *
	田村 允英 (北海道立近代美術館 学芸員)
監 事	苫名 直子 (公益財団法人 北海道立文学館 学芸課長) *
	宮井 和美 (モエレ沼公園 学芸員)

(* はチーフ)

令和3年3月15日から

会 長	佐藤 友哉 (札幌芸術の森美術館 館長)
副会長	苫名 真 (北海道立近代美術館 学芸副館長)
幹事長	中村 聖司 (北海道立近代美術館 学芸部長)
幹事 (事業)	久米 淳之 (北海道立近代美術館 学芸統括官) *
	坂本 真惟 (札幌芸術の森美術館 学芸員)
	門間 仁史 (北海道立旭川美術館 主任学芸員)
	野田佳奈子 (北海道立近代美術館 学芸員)
幹事 (会報)	岩崎 直人 (本郷新記念札幌彫刻美術館 業務係長) *
	三浦 泰之 (北海道博物館 学芸主幹)
	星野 靖隆 (北海道立近代美術館 学芸員)
幹事 (会計)	大下 智一 (北海道立近代美術館 学芸企画課長) *
	田村 允英 (北海道立近代美術館 学芸員)
監 事	苫名 直子 (公益財団法人 北海道立文学館 学芸課長) *
	宮井 和美 (モエレ沼公園 学芸員)

(* はチーフ)